

スターリン、トロッキー等の評価と党組織上の対応について

①第36巻『大会への手紙』

4-37〈大会への手紙 一極秘に！一〉にも収録

二

覚え書のつづき

1922年12月24日

さきに中央委員会の安定性について述べたのは、分裂を防止する措置——およそそういう措置がとれるかぎりで——のことをさしたものであった。というのは、『ルースカヤ・ムィスリ』誌の白衛派が（たぶん、エス・エフ・オリデンブルグであったとおもうが）、第一に、ソヴェト・ロシアを向こうにまわした彼らの賭け事^{かけ}で、わが党の分裂を当てにしたこと、第二に、この分裂をもたらすものとして党内にきわめて重大な意見の相違がおこることを当てにしたことは、もちろん、正しかったからである。

わが党は二つの階級を基礎としているので、党の不安定ということは、ありうる。そして、もしこの二つの階級のあいだに協定が成りたちえないものとするれば、党の没落は避けられない。そのばあいには、なにかと措置を講じたり、総じてわが中央委員会の安定性について論議したりしても、むだである。このばあいには、どんな措置を講じても、分裂をふせぐ力はないであろう。だが、たとえそういうことがおこるとしても、おそらく、それは遠い将来のことであろうし、またとうていありそうもないことなので、それについて論じるにはおよばないであろう。

私がいま念頭においてるのは、近い将来の分裂をふせぐ保障としての安定性のことであって、ここでは純然たる個人的な事情をいくつか検討してみようとおもう。

私は、この見地からみた安定性の問題で基本的なのは、スターリンやトロッキーのような中央委員であると考える。私の見るところでは、分裂の危険の大半は、彼らの間がらからきている。この分裂は避けようとおもえば避けられるだろうし、私の意見では、中央委員の数を50人ないし100人にふやすことが、とりわけ、それを避けるのに役だつにちがいない。

同志スターリンは、党書記長となってから、広大な権力をその手に集中したが、彼がつねに十分慎重にこの権力を行使できるかどうか、私には確信がない。他方、同志トロッキーは、彼が交通人民委員部の問題について中央委員会と闘争したことがすでに証明したように、めだつた点は、すぐれた才能をもつ人物というだけではない。個人的には、彼は、おそらく現在の中央委員中でもっとも有能であろうが、しかしまた、度はずれて自己を過信し、物ごとの純行政的な側面に度はずれて熱中する傾きがある。

現在の中央委員会のこのふたりのすぐれた指導者のもつこういう二つの資質はふとしたことから分裂をひきおこすことになりかねない。そして、もしわが党がそれを防止する措置を講じないなら、思いがけなく分裂がおこるかもしれない。

これ以上ほかの中央委員の個人的な資質を特徴づけることはやめにしよう。ただ注意しておきたいのは、ジノヴィエフとカーメネフの十月のエピソード*は、もちろん、偶然のものではなかったが、しかし、そのことで個人的に彼(ら)を責めてならないのは、まさに非ボリシェヴィズムの点でトロッキーを責めてならないのと同じである、ということであ

る。

* 事項訳注 P847~848

1917年10月10(23)日16(29)日の党中央委員会の会議で、ジノヴィエフとカーメネフがとった降伏主義的な行動をさす。彼らは、武装蜂起の即時準備にかんするレーニンの決議案に反対し、またそれに反対投票した。中央委員会の二度の会議で決定的な反撃をこうむったカーメネフとジノヴィエフは、10月18日、ポリシェヴィキが蜂起を準備していること、そして自分らが蜂起を冒険とみなしていることを、メンシェヴィキの新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』で声明した。そうすることによって彼らは、党の最大の秘密——近いうちに蜂起をおこなうという中央委員会の決定——を、ロジヤンコとケレンスキーにもらしてしまった。その同じ日にレーニンは、『ポリシェヴィキ黨員への手紙』のなかでこのふるまいを前代未聞のストライキ破りとよび、これをはげしく非難した（本全集、第26巻、219—223ページを参照）。

若い中央委員のうちでは、ブハーリンとピャタコフについてすこし述べたい。私の考えでは、彼らはもっともすぐれた人材（いちばんの若手のうちでは）であるが、彼らについてはつぎの点を考慮する必要があるとおもう。すなわち、ブハーリンは、党のきわめて貴重な、最大の理論家であるだけでなく、正当にも全党の寵児とみなされているが、彼の理論的見解を完全にマルクス主義的とみなすことには、非常に大きな疑問をいだかないわけにはいかない。というのは、彼にはスコラ学風のところがあるからである（彼はけっして弁証法を学ばなかったし、けっして十分にそれを理解しなかったと私はおもう）。

12月25日。つぎに、ピャタコフは、疑いもなくすぐれた意志とすぐれた才能をもった人物であるが、行政活動と物ごとの行政的な側面に熱中しすぎるので、重大な政治問題では彼をたよりにすることはできない。

もちろん、私の批評はいずれも、このふたりのすぐれた献身的な働き手が、自分の知識を補い、自分の一面性を矯正する折がなかったばあいを仮定して、その現状について述べたにすぎない。

レーニン

一九二二年十二月二十五日

エム・ヴェこれを筆記

1922年12月24日付の手紙への追記

スターリンは粗暴すぎる。そして、この欠点は、われわれ共産主義者のあいだや彼らの相互の交際では十分がまんできるものであるが、書記長の職務にあってはがまんできないものとなる。だから、スターリンをこの地位からほかにうつして、すべての点でただ一つの長所によって同志スターリンにまさっている別の人物、すなわち、もっと忍耐づよく、もっと忠実で、もっと丁重で、同志にたいしてもっと思いやりがあり、彼ほど気まぐれでない、等等の人物を、この地位に任命するという方法をよく考えてみるよう、同志諸君に提案する。この事情は、とるにたりない、些細なことのようにおもえるかもしれない。しかし、分裂をふせぐ見地からすれば、また、まえに書いたスターリンとトロッキーの間がらの見地からすれば、これは些細なことではないとおもう。あるいは、些細なことだとしても、決定的な意義をもつようになりかねないそういう種類の些細なことだとおもう。

レーニン

エリ・エフこれを筆記 一九二三年一月四日

三 *三はくまっくなくなつてないわれわれの機関の改善のために)のタイトルで14-43にも収録

覚え書のつづき

1922年12月26日

中央委員の人数を50人または100人にふやすことは、私のみるところでは、二重の目的、いや三重の目的にさえ役だつにちがいない。中央委員が多ければ多いほど、それだけ多くの人が中央委員会の活動で訓練されることになり、また、なにか慎重を欠いたやり方のために分裂がおこる危険はそれだけ少なくなるであろう。多数の労働者を中央委員会に入れることは、まったくなくなつてないわれわれの機関を労働者たちが改善する助けとなるであろう。この機関は、わが国では、実質上旧体制からうけついだものである。というのは、こんなに短い期間に、とりわけ戦争や飢饉などのさいに、それを改造することは、まったく不可能だったからである。だから、うす笑いをうかべたり、それみたことかとかばかりにわれわれの機関の欠陥を指摘してくださる「批評家」にたいしては、われわれは、この連中は現代の革命の条件を全然理解していないのだ、と平静にこたえることができる。五年のあいだに機関を十分に改造することは、まったく不可能であり、とりわけわが国の革命がおこなわれてきた条件のもとでは、なおさら不可能である。われわれが三年のあいだに新しい型の国家、労働者がブルジョアジーに反対して農民の先頭に立ってすすむ国家をつくりだしたというだけで十分であり、しかも、敵意をもった国際的環境のもとでこういうことを成しとげたのは、巨大な事業である。しかし、このことを意識しながらも、われわれが実質上ツァーリとブルジョアジーとから古い機関をひきついだのだということ、そして平和がやってきて飢えないだけの最小限の必要物が保障された今日では、機関の改善にすべての活動を向けなければならないということに、けっして目を閉じてはならないのである。

私は問題をつぎのように考えている。中央委員会にはいった何十人かの労働者は、ほかのだれよりもりっぱに、われわれの機関の点検や改造の仕事にあたることができる。この機能は、はじめ労農監督部に属していたのであるが、同部にはこの機能に応じる力がないことがわかったので、一定の条件でこれらの中央委員にたいする「付属物」または助手として同部をつかうほかはない。中央委員会にはいる労働者は、私の意見では、長期間ソヴェト機関で勤務してきた労働者（私の手紙のこの部分では、労働者というなかにいつでも農民をふくめて考えている）のなかからおもにえらぶのであつてはならない。というのは、そういう労働者には、すでにある種の伝統とある種の先入見とができあがっているものであるが、まさにそれらのものとたたかうことがのぞましいからである。

労働者出身の中央委員としては、わが国でこの五年間にソヴェトの職員に昇進した層よりも低い地位にあつて、平の労働者・農民にいつそう身近く、しかも、直接にも間接にも搾取者の部類にはいらないような労働者を、おもにくわえなければならない。私は、こういう労働者が中央委員会のすべての会議、政治局のすべての会議に出席し、中央委員会のすべての文書を読むなら、彼らは、ソヴェト体制の献身的な支持者——第一に、中央委員会そのものに安定性をあたえる能力があり、第二に、機関を革新し改善するためにほんとうに働く能力のある支持者の基幹部隊となることができるだろうとおもう。

レーニン

エリ・エフこれを筆記
二二年十二月二十六日

②『ゴスプランに立法機能をあたえることについて』 P708～712 12月27、28、29日
覚え書のつづき
一九二二年十二月二十七日

ゴスプランに立法機能をあたえることについて

この考えは、たしか同志トロッキーがもうずっとまえに提出したものだとおもう。そういうふうになると、われわれの立法機関の体系に根本的にちぐはぐなものを持ちこむことになるとおもったので、私はこの考えに反対した。しかし、この問題を注意ぶかく検討してみると、そこには実は健全な考えがふくまれていることがわかる。すなわち、ゴスプランは、有識者、専門家、科学界および技術界の代表者の集合体として、実は、いろいろの問題を正しく判断する資料をいちばん大量にもっているにもかかわらず、われわれの立法機関からいくらかはなれた存在となっているのである。

しかし、これまではわれわれは、ゴスプランは批判的検討を経た材料を国家に提出すべきであり、そして国家機関が国務を決定すべきであるという立場をもとにしていた。国務が異常に複雑になって、ゴスプランの委員の専門的鑑定を必要とする問題と、そういう鑑定を必要としない問題とをかわるがわる決定しなければならず、それどころか、ゴスプランの専門的鑑定を必要とするいくつかの事項とそういう鑑定を必要としない事項とがたがいに入りまじって出てくる案件を解決しなければならないばあいがしばしばおこってくる現状では、いまやゴスプランの権限を拡大する方向に一步をすすめるべきだと考える。

この一步を私はつぎのように考えている。ゴスプランの決定は、ソヴェトの普通の手続きではくつがえしえないことにし、その決定を変更するには特別の手続きを必要とすることにする。たとえば、問題を全ロシア中央執行委員会の会議に持ちこむこととか、特別の指令にもとづいて決定を変更するために問題を考究させ、ゴスプランの当該の決定を廃止すべきかどうかを考量する材料として、特別の規則にもとづいて報告書を作成させることとか、ゴスプランの問題の決定を再考するために特別の期限をさだめることとか、等々である。

私は、この点では同志トロッキーの意見をいれてよいし、またいれなければならないと考えるが、われわれの政治的指導者中の特別の一人物、または最高国民経済会議議長、等々をゴスプランの議長に任命するという点ではそうではない。この点では、現在、個人的な問題が原則問題とあまりに密接にからみあっているようである。私の考えでは、現在ゴスプランの議長の同志クルジジャンノフスキーとその副議長の同志ピャタコフとについて耳にするいろいろの攻撃、すなわち、一方では、法外に温和すぎるとか、自主性がないとか、無定見だとかいう非難を、他方では、法外に粗野だとか、軍曹式だとか、しっかりした学問的素養がたりないなどという非難を聞くというように、二重の方向でなされている攻撃

は、問題の二つの側面を極端に誇張して表現したものであって、実際にゴスプランでわれわれが必要としているものは、一方ではピャタコフ、他方ではクルジジャンフスキーを見本とすることのできる二つの型の性格を、たくみに結合することであるとおもう。

私は、ゴスプランをひきいる人は、一方では、ほかならぬ技術あるいは農学の部面で科学的教養があり、技術または農学の分野で数十年にわたる実践活動の大きな経験をつんだ人でなければならないとおもう。このような人物は、行政官的な素質よりも、広い経験と人々を引きつける能力とを持ちあわせていなければならないとおもう。

レニニシ

二二年十二月二十七日
エム・ヴェこれを筆記

五

ゴスプランの諸決定の立法的
性格についての手紙のつづき
二二年十二月二十八日

私は、国務の方向に決定的な影響をおよぼすことのできるわれわれの同志の一部が、物ごとの行政者的な側面を誇大に見ていることに気がついた。こういう側面は、もちろん、時と場所によっては必要なものであるが、科学的な側面や、広範な現実の把握や、人々を引きつける能力などと混同してはならない。

どの国家機関でもそうであるが、とくにゴスプランでは、この二つの資質を結びつけることが必要である。そして、同志クルジジャンフスキーが、ゴスプランにピャタコフを参加させ、仕事のことについて話し合ったということを私に告げたとき、私は、それに同意をあたえながらも、心のなかでいくらかの疑念をのこした一方、ときには、ここで政府要人の二つの型が結合されるだろうという期待をいだいたのであった。この期待がみたされたかどうか、それについてはいましばらく待つて、もうすこし長く実際の経験を見なければならぬ。しかし、原則としては、いろいろの性格や型（人々、資質）をこのように結合することが国家機関の正しい機能のために無条件に必要なこととは、疑いをいれないこととおもう。このばあいには「行政活動」を誇大に見ることは、およそあらゆる誇大視におとらず有害だとおもう。国家機関の指導者は、人々を引きつける能力を高度に持ちあわせていなければならないし、また人々の活動を点検するのに必要な、しっかりした科学的知識を十分に身につけていなければならない。これは、基本的なことである。これなしには、活動は正しいものとはなりえない。他方では、国家機関の指導者が行政の仕方を心得ており、またこの仕事でりっぱな助手をひとりまたは数人もっていることは、非常に重要である。この二つの資質を一身にかねそなえた人物はまず見つかりそうもないし、おそらくその必要もないであろう。

レニニシ

エリ・エフこれを筆記
二二年十二月二十八日
第 36 卷『大会への手紙』 P702～705

1922 年 12 月 24 日～1923 年 1 月 4 日